

The Effects of Talmy's Cognitive Framing Typology on Second Language Acquisition: A Study of Japanese and Chinese Speakers' Acquisition of English Motion and Change-of-State Events

著者	Spring Ryan Edward
号	13
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第156号
URL	http://hdl.handle.net/10097/57703

ライアン エドワード スプリング
RYAN EDWARD SPRING

学位の種類 博士（国際文化）
学位記番号 国博 第156号
学位授与年月日 平成26年 3月26日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期3年の課程）
国際文化交流論専攻
学位論文題目 The Effects of Talmy's Cognitive Framing Typology on Second Language Acquisition:
A Study of Japanese and Chinese Speakers' Acquisition of English Motion and Change-of-State Events
(Talmy の認知的言語類型化が第二言語習得へ及ぼす影響
ー日本語話者と中国語話者による移動・状態変化事象の英語表現の習得に関する研究ー)
論文審査委員 (主査)
教授 小野 尚之 准教授 中本 武志
准教授 ナロック ハイコ
教授 上原 聡

論文内容の要旨

第1章 はじめに

Talmy (1985) が提案した事象合成における言語類型は、認知言語学において興味深い挑戦課題の一つである。Talmy (1985) によれば、全ての言語は、「どのように出来事を理解し、言語フレームにコード化するか」という「フレーム化 (framing)」において、二つのタイプに分類することができるという。その提案に対して、反論や修正を提示する論文が数多く出ている (Slobin 2004, Beavers et al. 2010, Matsumoto 2003 など)。たとえば、Beavers et al. (2010) は、Talmy の類型は各々の言語において利用可能な言語資源の違いにすぎないと指摘している。さらに、Imbert (2012)は Talmy が提案した類型は、

記憶などの認知プロセスに影響されないと論じている。また、Slobin (2004)や Chen & Guo (2009) は、Talmy (1985) の類型にもう一つの言語タイプを追加する必要があることを指摘した。

さらに、Talmy (1985) が提案した言語類型は第二言語習得の分野にも適用されている。たとえば、Cadierno (2008) や Navarro & Nicholadis (2005) などの研究では、第二言語学習者の目標言語のタイプが母語と異なる場合、目標言語におけるフレーム化習得に困難が生じるかどうか議論された。しかし、Talmy (1985) が提案した類型化を適用する第二言語習得に関する研究の多くは、ヨーロッパ言語しか扱っていない。Inagaki (2002) などはアジア言語を取り上げているが、被験者の言語理解のみを観察し、学習者の言語産出は検討していない。さらに、Slobin (2004) や Chen & Guo (2009) が提案した新しい言語タイプを調査対象とした第二言語習得のフレーム化習得研究はまだ行われていないのが現状である。

そして、Talmy は自身が提案した言語類型は移動表現のみならず、状態変化、アスペクト、行為の相関づけ、実現の表現にも関わる類型化であるとしている。しかしながら、大体の研究は移動表現だけに限定されている。小野(2004)のコーパスデータによれば、Talmy (1985) の類型は十分状態変化表現にも当てはまると指摘されている。しかし、Talmy (1985) の類型における状態変化表現の第二言語フレーム化習得研究はまだ行われていない。

本論は以上に述べた研究の背景を受けて、以下の3点を研究の目的とする。

- i. Talmy (1985) が提案した言語類型化が Beavers, et al (2010) などが述べるように利用可能な言語資源の違いだけでなく、認知過程に関わるものであることを証明する。
- ii. Slobin (2004) が提案した新しい言語タイプを加え、第二言語学習者が母語と異なるタイプを学習する際、各言語タイプにおいて、移動表現に関してどのような誤用の傾向が生じるか、またはどの程度母語のフレーム化を保ち、どの程度第二言語のフレーム化を使うかを明らかにする。
- iii. Talmy (1985) の言語類型が状態変化表現の第二言語習得にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

以上の研究目的は先行研究を参考・比較しながら、実験による証明を試みた。本論文の第2章で研究目的 i と、第3章で研究目的 ii と、第4章で研究目的 iii と取り組む。第5章では考察を行い、結論を述べる。

第2章 Talmy による認知言語類型化

Talmy (1985) は二つ以上の出来事を一つの事象(event)として概念化し、一つの表現で表すことを「事象合成 (event conflation)」と名づけた。そして、事象合成において、主要なイベント(main event)

と共イベント (co-event)があると述べた。また、Talmy (1985)によれば、主要なイベントはイベントの動詞にコード化するか衛星 (satellite)³ によってコード化するかによって、全ての言語を「動詞枠付け言語 (verb-framed languages)」と「衛星枠付け言語 (satellite-framed languages)」の2種類に分類することができる。そして、Slobin (2004) や Talmy (2000) は、この類型化が認知プロセスに結び付けられることができると主張している。

本章では、Talmy (1985) が提案した言語類型化が Beavers et. al (2010) や Imbert (2012) などが述べたように、各言語に利用可能な言語資源の違いだけであることに反論するため、Talmy が提案した言語類型化がフォーカスに影響を与えることを証明する Soroli & Hickmann (2010) などを指摘する。また、衛星化⁴という現象を通して、Talmy の類型がプロトタイプに影響されることを証明する。英語母語話者は衛星枠付けパターンがプロトタイプになっているため衛星化が起こることを論じ、英語母語話者の第一言語習得において、衛星化が年齢・学習時間の増化につれて少なくなることを実験によって証明する。第2章に関して、以下の仮説を提示した。

- i. 英語母語話者は2単語段階で既に衛星枠付けパターンに偏る
- ii. 年齢・学習時間の増加に伴って、衛星化は減少する

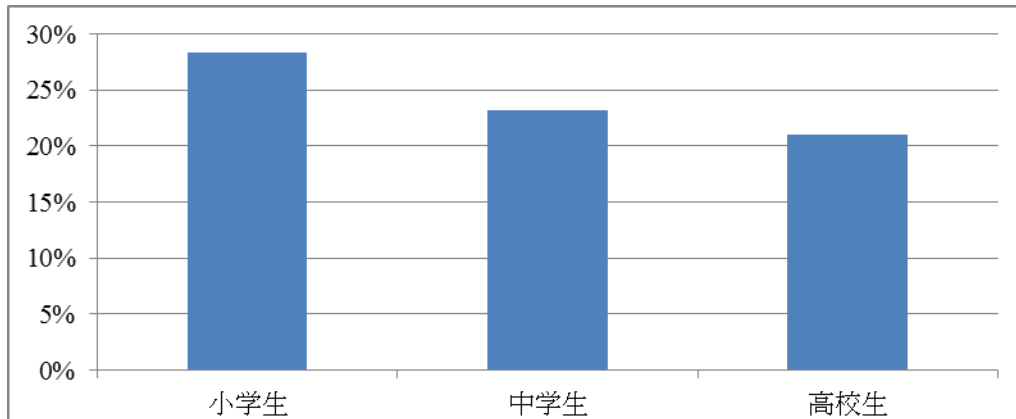
英語母語話者の2単語段階のデータを CHILDES コーパスから取り、英語母語話者が第一言語の最初段階から圧倒的に衛星枠付けパターンを使用することを指摘した (衛星枠付けパターンの使用は83.65%であったのに対して、動詞枠付けパターンの使用は7.55%であった)。また、この段階では、英語母語話者が既に衛星を移動様態動詞と結びつくことができるようになっていたことが証明できた (使用した衛星枠付けパターンの内、30%が移動様態動詞を使用した表現であった)。これらのデータから、英語母語話者は2単語段階で衛星枠付けパターンに偏ることが証明でき、仮説 i を支持することができた。

次に、アメリカ在住の小学生、中学生、高校生の英語母語話者を被験者として、著者が作った短い動画を見せ、単語を一つ提供し、動画の内容を提供された単語を使って1文で説明してもらった。学生が衛星化を行った割合を比較し、どのような傾向が見られるかを観察した。その結果は以下の図1に示した。

図1 英語母語話者の衛星化使用割合

³ Talmy (1985) によれば、衛星というのは名詞句と前置詞句以外に姉妹関係で動詞を補足する文法構造である。但し、Talmy (2009) や Croft et al. (2010), Harr (2012) etc. によれば前置詞は衛星に含まれる。

⁴ 衛星化は無意味に衛星を経路動詞に加えることと提示する。例えば、英語では *exit out* や *ascend up* を挙げられる。



グループ間の有意差は一元配量分散分析で確認し、有意差が見られた ($F(2,154) = 3.45, p=0.03$)。この結果から、学習が進むに連れて、衛星化の使用が少なくなることが明らかになった。このデータが仮説 ii を支持した。

実験の結果とコーパスのデータを参考にした結果、英語母語話者において衛星枠付けパターンはプロトタイプであり、フレーム化に影響を及ぼすことを指摘できた。そして、衛星枠付けパターンがプロトタイプになっているため、英語母語話者が初めて動詞枠付けパターンと接する場合も衛星化を行ってしまうことを推測できる。本章で指摘するデータと参考文献を考察した結果、最初の研究目的、「Talmy (1985) が提案した言語類型化が認知過程に関わるものであることを証明する」ことが成し遂げられた。

第3章 移動表現の第二言語習得における Talmy の類型化

Cadierno (2008) などの先行研究は以前、母語と異なるタイプを習得している被験者を集め、フレーム化が特に習得し難いという結果を得た。但し、これまでの第二言語フレーム化習得研究では等価枠付け言語を対象として取り上げるものがなかった。また、アジアの言語を取り上げる研究がほとんどなかった。そこで、本章では3つの言語タイプを取り上げ、アジア言語とヨーロッパ言語をどちらも取り上げた研究とした。第1章で述べた研究目的 ii に取り組む前に、Slobin (2004) が提案した新しい言語タイプを研究の対象とする価値があることを明らかにする必要がある。この点を実行するために、先行研究を援用し、英語、中国語、日本語がどの言語タイプであるか、そして各言語タイプの移動表現において、どのようなパターンがあるか、そのパターンにどのような制限があるか、そしてどのような傾向が強いかを調べた。その結果、英語が移動表現において、移動の経路を主に衛星にコード化する衛星枠付け言語 (satellite-framed language) というタイプであり、日本語が移動表現において、移動の経路を主に動詞にコード化する動詞枠付け言語 (verb-framed language) というタイプであり、中国語が移動表現において、移動の経路も移動の様態も同等の文法形式にコード化する等価枠付け言語 (equipollently-framed language) というタイプであることが明らかになった。この結果に基づいて、移動表現に関する実験の課題を作成した。

Cadierno (2008) などの先行研究の結果から、日本語母語話者と英語母語話者の間に枠付けパターンに相違点が観察されると考える。そして、Slobin (2004) や Chen & Guo (2009) の研究から、中国語母語話者の枠付けパターンはまた日本語母語話者と英語母語話者と異なることが推測される。さらに、

Cadierno (2008) の研究と同じように、学習者が衛星の使用よりも移動の様態を表すところに大きな相違点が現れると考える。Slobin (2004) によれば、等価枠付け言語である中国語を母語とする人は動詞枠付け言語である日本語を母語とする人よりも、移動の様態を描写する傾向が強い。そのため、本研究では特に移動の様態の表し方に相違点が見られると考える。そして、日本語母語話者と中国語母語話者は、母語の経路動詞を、辞書でよく出てくる英語の「go +前置詞」というパターンを用いて翻訳する傾向がある。これは、前置詞が移動の経路の意味を表していることを十分理解できていないためであると考えられる。このため、「移動動詞+前置詞」というパターンの習得は難しいものと考えられる。

これらの観察に基づいて、以下の仮説を提示する。

- i. 日本語母語話者においても、中国語母語話者においても、中級英語学習者と上級英語学習者の間に有意差が見られることを予測する
- ii. 中国語母語話者と日本語母語話者の間に、英語のフレーム化習得に有意差が見られることを予測する
- iii. 中国語母語話者においても、日本語母語話者においても、中級英語学習者と上級英語学習者の間、そして英語学習者全体と英語母語話者の間に、衛星枠付けパターンの使用の差よりも、移動様態動詞・直示動詞の使用率の方が高いという相違点が見られることを予測する

移動表現に関する第二言語習得実験では短い動画（7~31 秒）をアメリカで英語を勉強している中国人と日本人に見せ、その動画で何が起こったかを 1 文で説明してもらった。また、同じ動画を英語母語話者と別の中国語母語話者と日本語母語話者に見せ、同じように 1 文で動画の内容を説明してもらった。その結果、は以下の図 2~図 4 にまとめた。

図 2 滞在期間で分けた英語学習者の衛星枠付けパターンの使用率

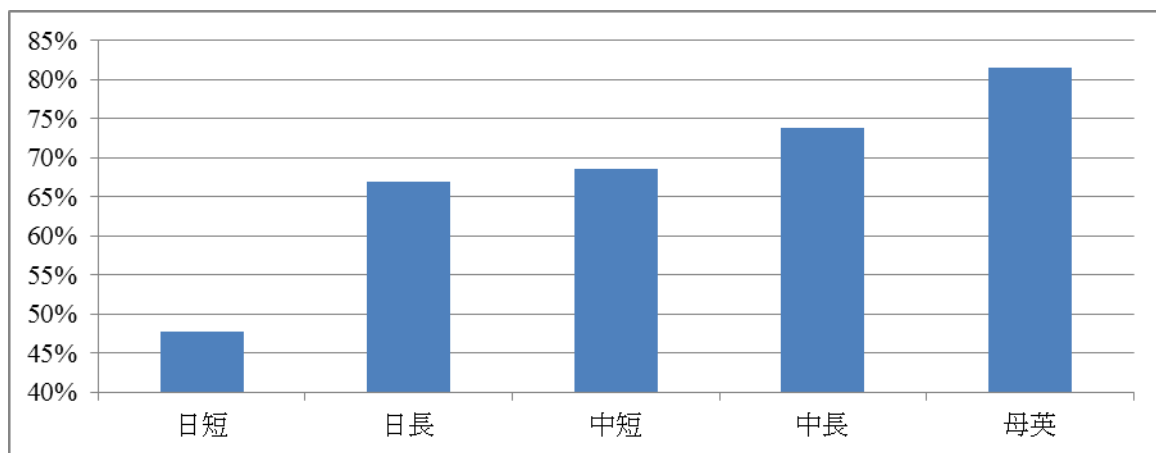


図 3 滞在期間で分けた英語学習者の移動の様態の表し方

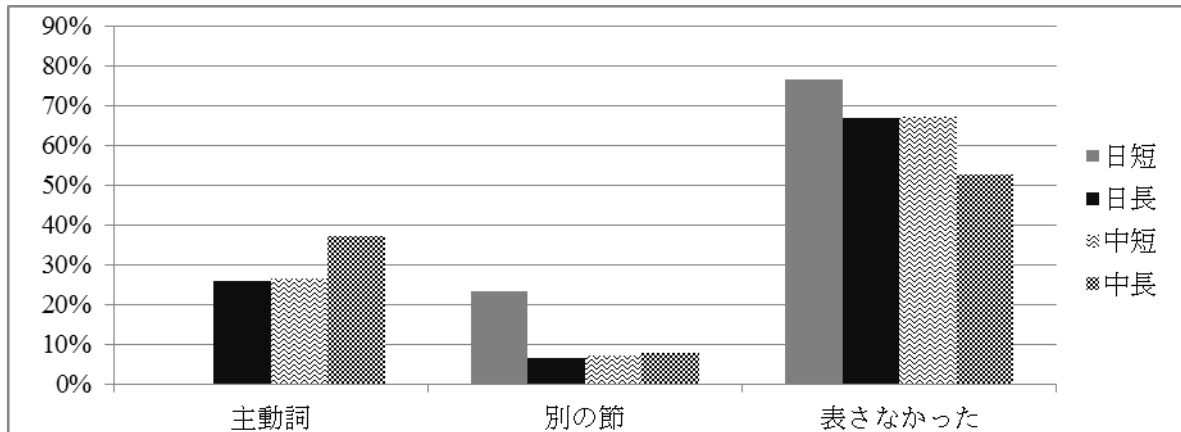
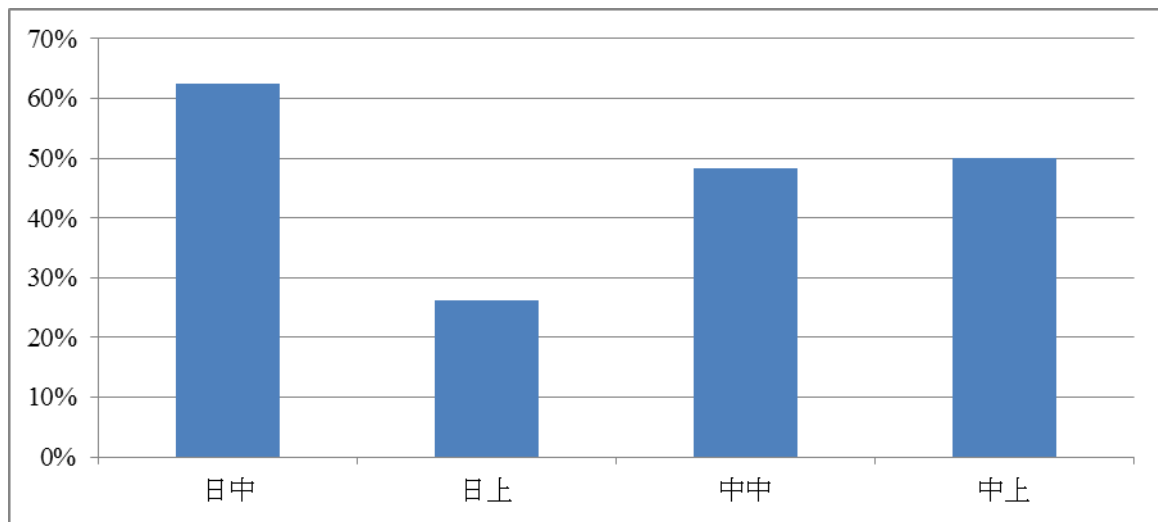


図4 英語学習者の「go」の誤用率



上記のデータに統計分析を行い、以下の点が明らかになった。

- i. 日本語母語話者と中国語母語話者の英語フレーム化習得において、英語能力よりも、英語圏への滞在期間の方が影響を与える
 - ・英語学習者をグループ分けした際、TOEFLの点数で分けたよりも、滞在期間で分けた方が有意差は見られた
- ii. 日本語母語話者の英語フレーム化習得に関しては、学習者レベルの間に有意差があるのに対して、中国語母語話者の英語フレーム化習得に関しては、中級レベルで化石化する
 - ・日本人英語学習者が衛星枠付け使用に関しても、移動様態動詞の使用に関しても、滞在が短いものと滞在がないもの間に有意差が見られたのに対して、中国人英語学習者の衛星枠付け使用に関しても、移動様態動詞の使用に関しても、滞在が短いものと滞在が長いもの間に有意差が見られなかった。
- iii. 英語のフレーム化習得に関しては、中国語母語話者が日本語母語話者よりも早く習得できる
 - ・衛星枠付けの使用においても、移動の様態の表し方においても、中国語母語話者である英語学習者は明らかに日本語母語話者である英語学習者よりも英語母語話者に近いフレー

ム化を使用していた。衛星枠付けの使用に関して、中国人英語学習者と英語母語話者の間に有意差が見られなかったのに対して、日本人英語学習者と英語母語話者の間に有意差が見られた。移動表現の表し方に関しては、各グループの間に有意差が見られた。

- iv. 中国語母語話者においても、日本語母語話者においても、衛星枠付けパターンの使用よりも、移動様態動詞・直示動詞の使用の方が習得し難い
 - ・衛星枠付けパターンに関して中国人英語学習者と英語母語話者の間に有意差が見られなかったのに対して、移動様態動詞の使用の間には見られた。日本人英語学習者の滞在が短いものは一度も移動様態動詞を使用せずに、衛星枠付けパターンの使用よりも遥かにできなかった。また、中国人英語学習者が直示動詞の使用に関して化石化してしまい、日本人英語学習者の英語能力が低いものはよく間違いを起こした。

以上の結果が仮説 ii と仮説 iii を支持した。しかし、仮説 i は半分しか支持されなかった。日本人英語学習者がレベル間に有意差が見られたが、中国人英語学習者のレベル間に有意差が見られなかった。また、滞在期間が英語能力よりもフレーム化習得に影響を及ぼす結果は予測しなかったが、とても興味深い発見であった。

第4章 状態変化表現の第二言語習得における Talmy の類型化

Talmy が提案した言語類型が状態変化表現の第二言語習得に影響を及ぼすことを証明するために、2 つの実験を行った。移動表現の第二言語習得実験と同様に、中国語母語話者と日本語母語話者の英語学習を比較することにした。状態変化表現の第二言語習得実験はまだ行われていないため、言語理解実験と言語産出実験はどちらも必要と考える。

日本語の状態変化表現では衛星枠付けパターンは基本的に許容されないため、日本語母語話者は基本的に中国語母語話者よりも英語の状態変化における衛星枠付けパターンの産出・理解が遅れると予測される。なお、移動表現実験の結果から日本人英語学習者には格助詞「に」が前置詞 *to* と同じであるという誤解がよく見られるため、日本人英語学習者は *to* が含まれる状態変化を表す前置詞句を *to* が含まれない状態変化を表す前置詞句よりも早く習得すると考えられる。一方、中国語の状態変化表現では等価枠付け・衛星枠付けパターンが日本語よりも許容される。しかし、許容されるパターンは大體動詞・形容詞を含んでいるパターンが多いことから、中国人英語学習者は形容詞が含まれる状態変化を表す英文を形容詞が含まれないものより早く習得すると考えられる。以上より、状態変化表現の第二言語習得研究において、以下のような仮説を提示する。

- i. 言語理解実験では、中国人英語学習者と日本人英語学習者は動詞枠付け表現と「動詞＋前置詞・不変化詞」という衛星枠付け表現を同じように理解し、中国人英語学習者は日本人英語学習者よりも（動詞＋形容詞）という衛星枠付け表現を正しく理解することを予測する

- ii. 言語産出実験では、中国人英語学習者は日本人英語学習者よりも状態変化の様態を表す動詞を使用することを予測する
- iii. 言語産出実験では、日本人英語学習者が、格助詞「に」を前置詞「to」と同じように使用するという過剰般化が見られることを予測する
- iv. 言語産出実験では、「動詞+前置詞」という衛星砕付け表現は中国人英語学習者においても、日本人学習者においてもあまり使用が見られないことを予測する

言語理解実験では、英語学習者が英語の状態変化表現を正しく解釈できるかどうかを明らかにできるように工夫した。著者が短い動画を作成し、中国人英語学習者、日本人英語学習者と英語母語話者に見せた。各動画について英文を5つ提供し、被験者に英文の内容が動画の内容と一致するかどうかを1～5の段階的に判断してもらった。各グループの結果を比較し、英語学習者と英語母語話者が英文を同じように解釈しているかどうかを調べ、日本人英語学習者と中国人英語学習者の間にどのような相違点や共通点があるか観察した。その結果を以下の図5～図6にまとめた。

図5 言語理解実験：被験者の動詞砕付け表現に対する評価

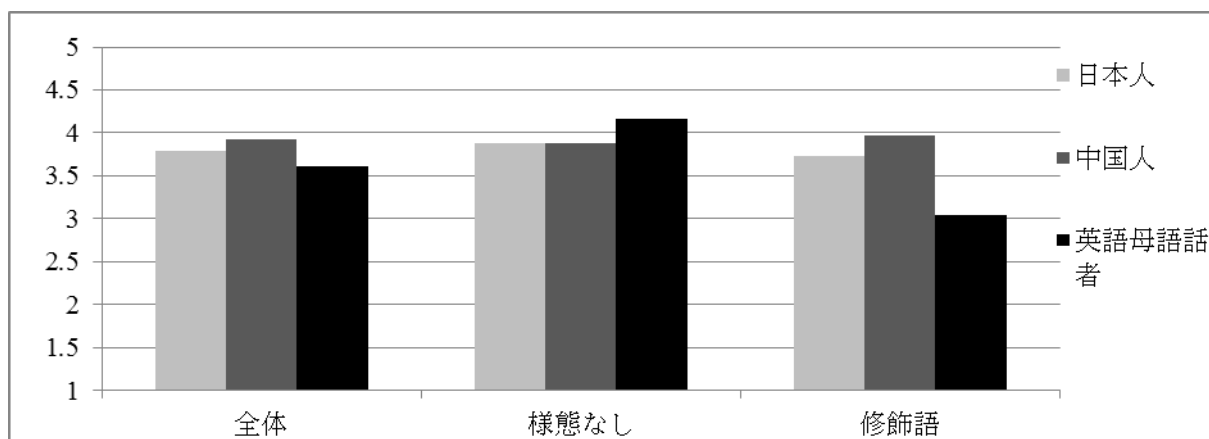
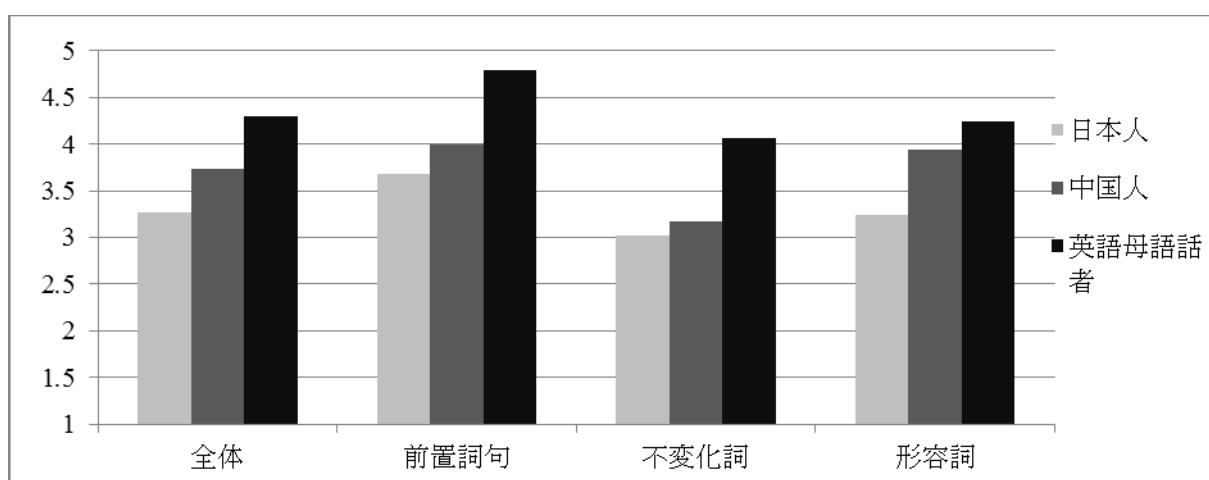


図6 言語理解実験：被験者の衛星砕付け表現に対する評価



言語産出実験は、英語学習者が英語の状態変化表現をどのように使用するかを調べる実験である。著者が短い動画を作成し、被験者に動画の内容を1文で英語で説明してもらった。被験者は(1)日本

在住、日本語を母語とする中級英語学習者、(2) 英語圏在住の経験有、日本語を母語とする上級英語学習者、(3) 中国在住、中国語を母語とする中級英語学習者と(4) 英語圏在住の経験有、中国語を母語とする上級英語学習者にした。そして、コントロール群として、日本語母語話者、中国語母語話者、英語母語話者にそれぞれ自分の母語で同じように動画を説明してもらった。すべての解答を比較し、学習者が様々な学習レベルでどのくらい母語の枠付けに沿って言語を産出しているのか、または日本語母語話者と中国語母語話者の習得過程にどのような相違点や共通点があるのかを調べた。その結果を以下の図7～図9にまとめた。

図7 言語産出実験：状態変化表現における学習者の衛星枠付け使用率

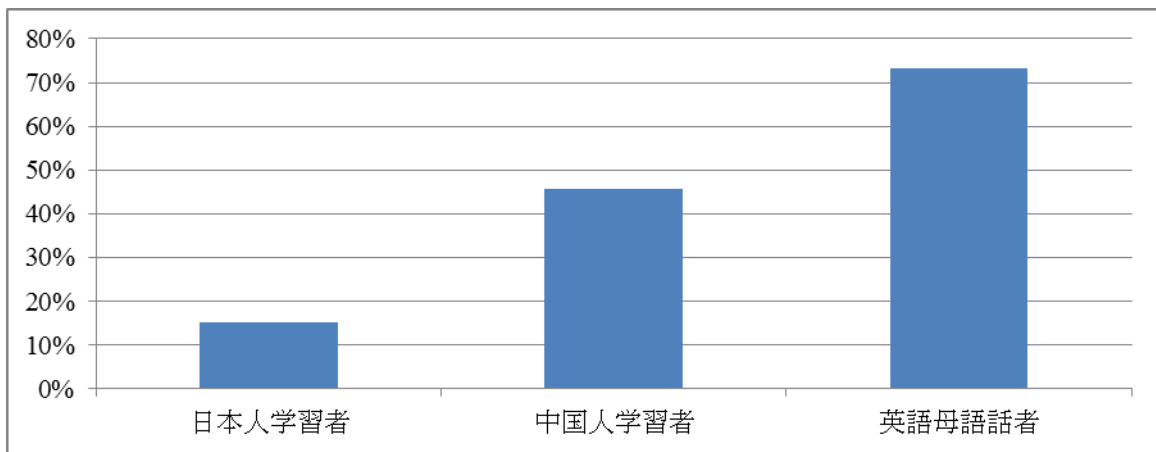


図8 言語産出実験：学習者の衛星枠付け使用率（パターン分け）

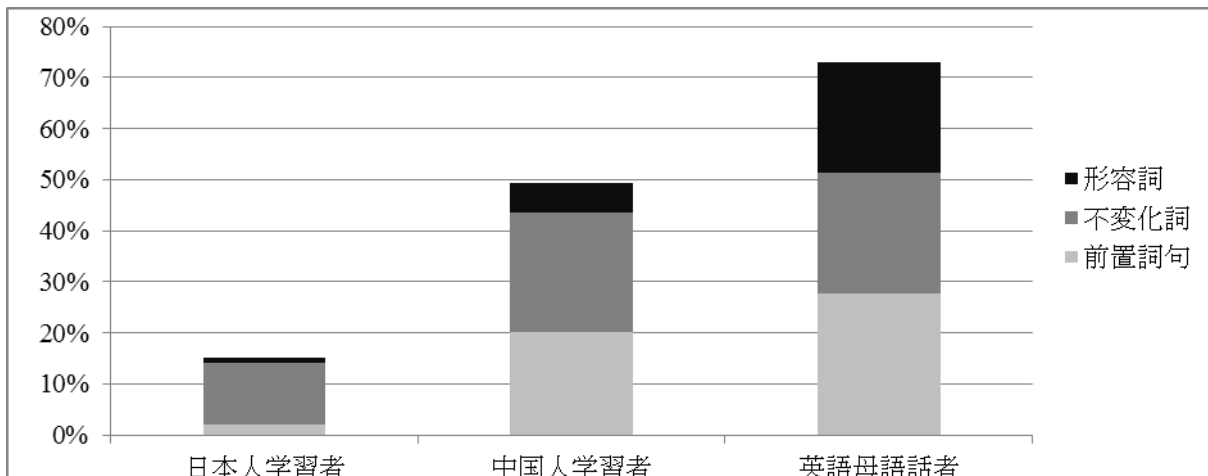
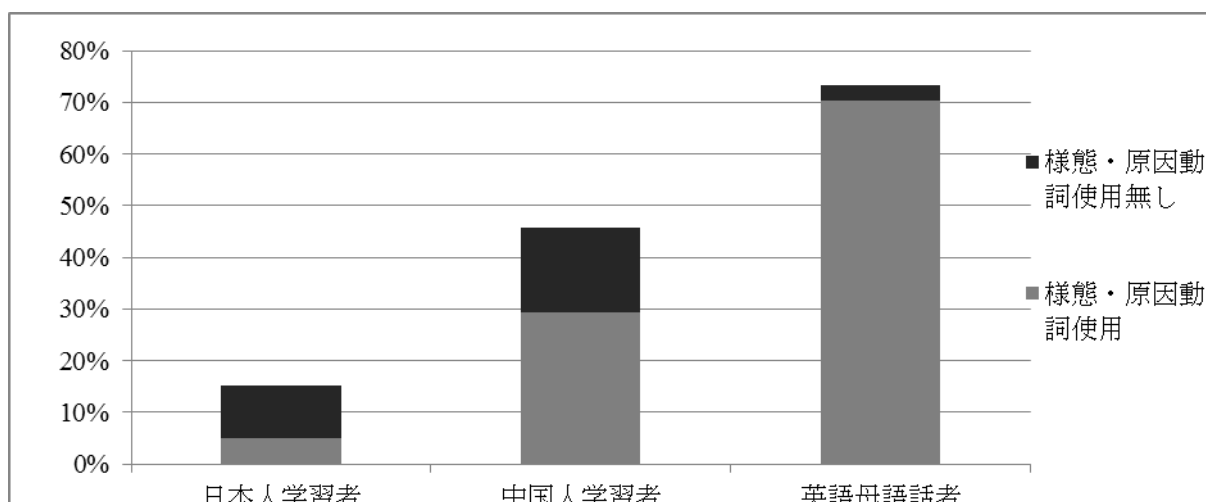


図9 言語産出実験：学習者の衛星枠付け使用率（様態・原因の有無分け）



上記のデータに統計分析を行い、以下の点が明らかになった。

i. 母語のタイプは第二言語における言語理解と言語産出に異なる影響を与える

- ・このことは中国人英語学習者における「動詞＋形容詞」というパターンの理解と産出の間の差から分かる。中国語には同じパターンがあるため英語の類似表現は理解できたが、産出はあまりできなかった（言語理解において有意差は見られなかったのに対して、言語産出において有意差はみられた）

ii. 中国人学習者が日本人学習者よりも早く英語の状態変化フレーム化を習得する

- ・このことは言語理解の実験においても、言語産出の実験においても観察できた。中国人英語学習者と日本人英語学習者の理解・産出において有意差が見られた。

iii. 英語のフレーム化を習得する際に、状態変化表現において、「不変化詞→前置詞句→形容詞」という順番で習得する

- ・このことは中国人英語学習者と日本人英語学習者の言語産出パターンから分かった。中国人英語学習者においても、日本人英語学習者においても、一番利用していた衛星枠付けパターンは不変化詞が含まれたものである。前置詞句が含まれたパターンは次に使用され、形容詞が含まれたもの最も使用されなかったパターンである。なお、言語理解のデータも参考にすると、本実験の中国人英語学習者が日本人英語学習者と異なる習得段階にいることが分かる。

上記の結果は仮説を完全に支持したとは言えないが、第二言語フレーム化習得という分野に大きく貢献したと考える。仮説 i に関しては、実験のデータがほとんど支持したが、中国人英語学習者は「動詞＋形容詞」というパターンの言語産出が特に優れていない点だけが予想外であった。仮説 ii に関しては、変化の様態を表す動詞の使用において、中国人英語学習者と日本人英語学習者の間に有意差が見られて、実験のデータが指示された。仮説 iii に関しては、日本人英語学習者が、格助詞「に」を前

置詞「to」と同じように使用するという過剰般化が言語理解実験では見られなかったが、言語産出実験ではそれが見られたと考える。最後に、仮説 iv に関しては、本実験のデータが支持しなかった。むしろ、日本人英語学習者においても、中国人英語学習者においても「動詞＋不変化詞」という衛星枠付けパターンを最も早く習得した。学習者が句動詞を勉強し、不変化詞を使うようになってから共通単語がある前置詞に結び付けるためであると考え。また、母語のタイプは第二言語における言語理解と言語産出に異なる影響を与えるという結果は予想外であったが、移動表現の第二言語フレーム化習得において Cadierno (2008) の結果が Inagaki (2002) の結果と若干に異なっていることも説明できると考える。

第5章 結論

本論文では Talmy (1985) があげた言語類型化が認知プロセスに由来するものと仮定し、第二言語習得において妥当性を検証した。本論では(i) Talmy (1985) があげた言語類型化がプロトタイプに影響されることを指摘し、(ii) 動詞枠付け言語の母語話者と等価枠付け言語の母語話者が衛星枠付け言語を習得する際、どのような共通点と相違点があったか明白にし、(iii) Talmy の類型化が第二言語の状態変化表現習得にどのような影響を及ぼすかを示した。そして、本論の結果に基づいて、(i) 移動表現と状態変化表現における、母語と異なる言語資源を教えるべきであること、(ii) 習得しやすく、化石化しやすい不自然な表現を避けた方がよいこと、(iii) 焦点の相違点に気付くように指導すべきであることという3つのアドバイスを第二言語の教育に提案した。

参考文献

- Beavers, J., Levin, B., & Tham, S. (2010) The typology of motion revisited. *Journal of Linguistics* 46, p. 331-337.
- Caiderno, T. (2008). Learning to talk about motion in a foreign language. In N. Ellis & P. Robinson (Eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition* (pp.239-275). New York, NY: Routledge.
- Cadierno, T. and Lund, K. (2004). Cognitive linguistics and second language acquisition: Motion events in a typological framework. In B. VanPatten, J. Williams, S. Rott, & M. Overstreet (Eds.), *From-meaning connections in second language acquisition* (pp. 139-154). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Chen, L. & Guo, J. (2009). Motion events in Chinese novels: Evidence for an equipollently-framed language. In *Journal of Pragmatics*, In Press, Corrected Proof, Available online 9 December 2008, ISSN 0378-2166, DOI:10.1016/j.pragma.2008.10.015.
- Imbert, C. (2012) Path: Ways Typology has Walked Through it. In *Language and Linguistics Compass* 6/4 (pp. 236-258). Blackwell Publishing Ltd.
- Inagaki, S. (2002). "Japanese learners' acquisition of English manner-of-motion verbs with locational/directional PPs". In *Second Language Research* 2002; 18; 3. Sage Publications.
- Matsumoto, Y. (2003) *Typologies of Lexicalization Patterns and Event Integration: Clarifications and*

- Reformulations*. In “Emperical and Theoretical Investigations into Language – A Festschrift for Masaru Kajita”. Kaitakusha
- Navarro, S. & Nicoladis, E. (2005). Describing motion events in adult L2 Spanish narratives. In D. Eddington (Ed.), *Selected Proceedings of the 6th Conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese as First and Second Languages* (pp.102-107). Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Ono, N. (2004) Ido to henka no gengo hyogen: ninchi-ruikeiron no shiten kara. In *Taisho gengogaku no shin-tenkai*, pp. 3-26. Hitsuji Shobo
- Slobin, D.I. (2004) The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist & L. Verhoeven (Eds.), *Language in mind: Advances in the study of language and thought* (pp. 157-192). Cambridge, MA: MIT Press.
- Soroli, E. and Hickmann, M. (2010) Language and spatial representations in French and English: evidence from eye-movements. In G. Marotta, A. Lenci, L. Meini, and F. Rovai (Eds.) *Space in language* pp. 581-600. Pisa: Editrice Testi Scientifici.
- Talmy, L. (1985) Lexicalization patterns. Semantic Structure in lexical form. In T. Shopen (Ed.) *Language typology and syntactic description*, Vol. 3 pp. 36-149. Cambridge: CUP.
- Talmy, L. (1987) Lexicalization patterns: Typologies and universals. *Berkeley Cognitive Science Report* 47.
- Talmy, L. (1991) Path to realization: A typology of event conflation. In *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley, Calif.: Berkeley Linguistics Society.
- Talmy, L. (2000a). *Toward a cognitive semantics: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press
- Talmy, L. (2000b). *Toward a cognitive semantics: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press
- Talmy, L. (2009) Main verb properties and equipollent framing. In J. Guo, E. Lieven, N. Budwig, S. Ervin-Tripp, K. Nakamura and S. Özçalışkan (EDs.) *Research in the tradition of Dan Isaac Slobin* pp. 389-402. New York and London: Psychology Press.

論文審査の結果の要旨

本研究は、L. Talmy の研究によって知られるようになった言語類型の仮説について、第二言語習得のデータを用いて実証的に論証を行ったものである。Talmy は、現実世界の出来事を言語によって表現する場合、世界の言語には動詞を中心にして表現する言語と、動詞以外の付加的要素を中心にして表現する言語の 2 種類があることを指摘し、前者を動詞フレーム言語、後者をサテライト・フレーム言語と呼んだ。これによると、日本語は動詞フレーム言語、英語はサテライト・フレーム言語とされる。さらに後の研究で中国語は等価フレーム言語という第 3 のタイプであると言われている。この類型化の仮説には様々なアプローチから検証が行われており、論争の的になっているのが現状である。

本研究は、異なるフレームタイプの母語話者が第二言語として英語を学習した場合、類型化の影響がどのように表出するかを実験的な手法で調査したものである。実験は文の理解と産出の両面から明らかになるよう綿密な計画に基づいて行われ、実験結果は適切に統計処理された上で分析されている。その結果、本研究では中国語母語話者と日本語母語話者の間に、英語のフレームタイプの習得において有意な差が見られることが明らかになった。すなわち、事象フレームの類型は第二言語においても影響を及ぼすことがわかった。

本研究の独創的なところとしては次のような点があげられる。従来、第二言語習得との関連においてこの仮説を検証した研究は主にヨーロッパ言語を中心に行われていたが、それを日本語、英語、中国語というまったく系統の異なる言語において検証したのは本研究が初めてである。また、ほとんどの研究が移動事象に限定して行われているのに対し、本研究は、移動事象と状態変化事象を対比させ、本来この仮説が対象としていた特定の事象を越えた一般性を検証している。さらに、第二言語習得に関わる類似の研究では言語理解のみを扱う傾向があるが、本研究は言語理解と同時に言語産出にも目配りし、より一般性の高い見地から仮説の検証を行おうとした点である。

論文審査会では、本研究の特に優れた点として、これまで扱われたことのない日本語と中国語の事象フレームの比較研究に踏み込んだこと、第二言語習得における理解と産出をバランスよく分析していること、移動事象に状態変化事象を加えることで仮説のより一般的な検証を目指したことなどがあげられた。以上のことから、審査会は本論文が執筆者の自立した研究能力と深い学識を示すものと認定し、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。